

第 6 0 回学習会を、平成 2 7 年 6 月 2 6 日 (金) 19:00~20:00 福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

第 6 0 回の内容

講師 重枝一郎先生

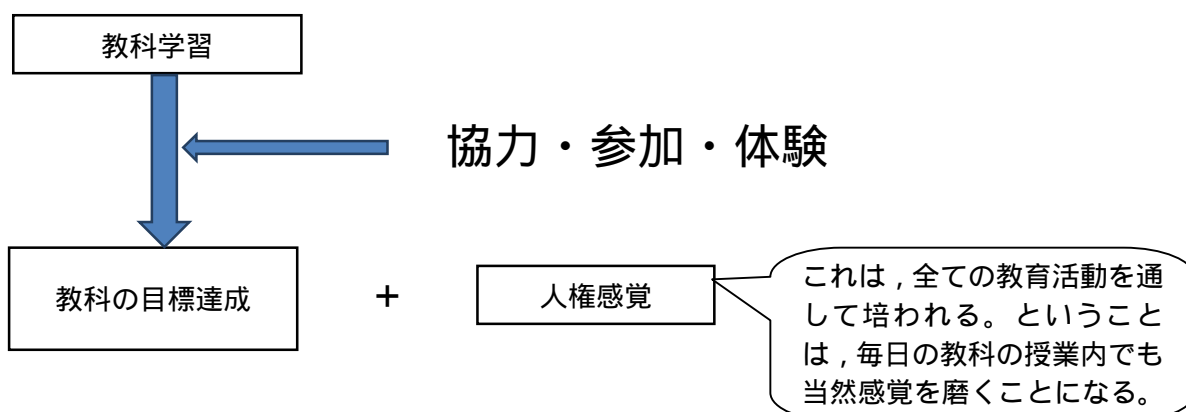
人権教育の視点に立った授業づくり

- 1 人は人で磨かれる
- 2 授業の基礎的条件の確立
- 3 集団の成熟をめざす
- 4 人権教育も○○教育もねらいを共有できる
- 5 実践 DVD 視聴 (福翔高校 1 年生 OR)

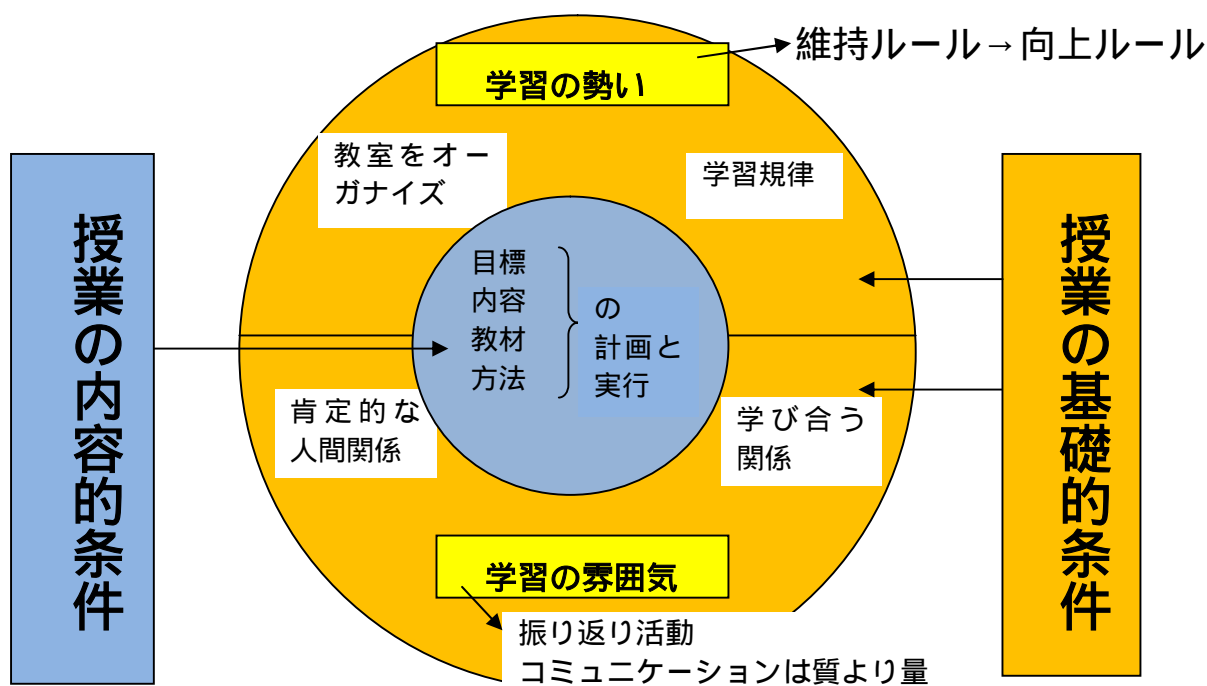


人権教育の視点に立った授業づくり

1 人は人で磨かれる



2 授業の基礎的条件の確立



学力向上以外の何かにつながる

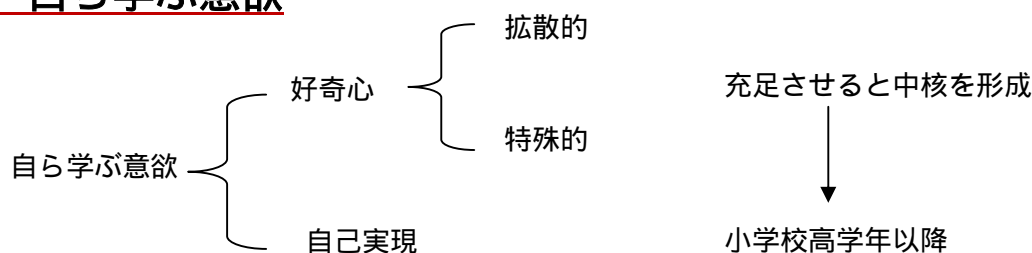
3 集団の成熟をめざす

- 集団の成熟
凝集 → 統合 → 変化 → 組織化 → リーダーシップの拡散
- × 集団の退行
解体 → 分散 → 安定化 → 混沌化 → リーダーシップの拡散
- 教示的 → 説明的 → 参加的 → 委任的

4 人権教育も○○教育もねらいを共有できる

- 教科 ○ キャリア教育 ○ 特別活動 ○ 道徳の時間 ○ 部活動

5 自ら学ぶ意欲



【ビデオ】

「福翔高1年生OR（生徒指導総合講座）」（説明プリント別紙）



教師が何を語るか

「知」は、一人で本を読んでも獲得することができます。しかし、「感覚」は、人との関わりやつながりの中でしか獲得できません。

「感覚」を育てるためには、子どもが自ら「感じ、考え、行動する」場を設定し、実際に体験させることが有効です。実際に試みることで、気付くことがあります。

その気付きを言語化するためには、教師の語りが重要です。体験活動をさせる時に、教師がどんな口調で何を語るのか。

教師は「場」を設定すると共に、子どもの気付きを促し価値付ける「語り」ができるようにならなければなりません。それを、「風土会」で学んでほしいと思います。

「風土会」で学んだことを、そのままする必要はありません。そこに、「自分だったら」を加味して、自分なりのやり方で実践してほしいと願っています。

例えば、道徳的な「感覚」を身に付けさせたいなら、「自分のためになり人のためにもなる行動を追究しよう」と教師が語ります。そして、実際に、それはどんな行動なのかを考えさせ、実行させます。その振り返りで、子ども達の考えを交流させ、教師が価値付けます。そうすると、知的理解にとどまらず、感覚を実感することができます。

「知的理解」と「人権感覚」を統合する

「知識」は、トピック的に得ることができます。しかし、「感覚」は日常的に積み上げないと身に付きません。学校の1日の大半は授業です。教師が、教科の授業の中で人権感覚を養うという意識をもっているかどうかで、子どもへの教育効果が違ってきます。

つまり、「教科の学習」+「人権感覚を養う」という意識です。そのためには、授業の中に意図的に、子どもが「協力・参加・体験」できる場を設定することも必要です。「協力・参加・体験」ができないクラスは、人権感覚が育っていないクラスと言えるかもしれません。

技能教科は、「協力・参加・体験」する場は盛りだくさんです。しかし、その他の教科では、教師側が意識して場づくりをする必要があります。

図を示して子どもに語る

「授業内容を深く理解し、学力が高いクラスは、基礎的条件がそろっている。基礎的条件とは、学習規律、肯定的な人間関係、学び合う関係、学習環境。基礎的条件と内容的条件には相互作用があり、相乗的に高まっていく」という内容を教師が語るとき、言葉だけではなく、図を示すと効果的です。その図を教室掲示するのもよいと思います。

また、子どもがイメージをもちやすい「例え話」をするのも効果的です。

サッカーで例えると・・・

「サッカーの練習をするのに、狭くて石がたくさんあるでこぼこしているグラウンドでするのと、きれいな芝生でするのとでは、モチベーションが違う。きれいな芝生では、練習をしなさいと言わなくても、自ら練習する。では、この教室はどうですか。後ろの棚はどうなっていますか。机は並んでいますか。どんな風に並べたら、勉強に集中できる環境になりますか」

教師は語りながら、子どもの反応を見ます。教師が相手意識をもち、子どもの反応に合った語りをするのです。例えば、コーチングで子どもの考えを引き出したり、「こうしたらどう」と示したり、相手や場面に応じて語りを変えます。子どもの反応から、一瞬で判断し、マッチングした語りをします。

教師の語りが「教示的」「説明的」ばかりでは、集団は退行していきます。集団の成熟度に応じて、または、集団を成熟させるために意図的に、「参加的」「委任的」な対応をしていくようにします。

それを、さりげなくできるようになるのが理想です。子ども達を認めて任せていくという方向に、シフトしていきます。

ねらいを共有する

教師は、人権教育をする時は人権教育のねらい、キャリア教育ならキャリア教育のねらいというように、ひとつひとつというとはなく、それぞれのねらいを共有するという意識で教育活動をしていきます。

ねらいをたくさんという発想ではなく、ひとつに焦点化してもよいと思います。「思いやり」をキーワードにしてもよいのです。子どもに効果的に入っていくことを考えながら、様々な教育活動を関連させ、相乗効果を上げていきます。教師はそのような発想をもち、教育効果を高めていきます。

目の前の子ども達にどんな力を身に付けさせたいのか、教師がビジョンをもち、それを子ども達にも示します。こんな風になってほしいという理想を示すのも効果的ですし、場合によっては、最悪の状況を示すのも効果的です。

自ら学ぶ意欲

ねらいには、「自ら学ぶ意欲」というキーワードがよく使われます。この言葉について、自分自身のことを振り返ってみると、発達段階によって特徴があるようです。

赤ちゃんは、何でもさわってみたいという好奇心がいっぱいです。それを、「拡散的好奇心」と言います。その頃に大人がすることは、安全面に気をつけることです。

それが、3才頃からは個性が出てきます。例えば、昆虫が好きであったら、図鑑を与えるなど刺激を与え、共感的になることで、自ら学ぶ意欲が高まります。このように、その子どもの好奇心や意欲を充足させると、中核が形成されていきます。

小学校高学年から中学生になると、自己実現への欲求が生まれます。目標をもつことが意欲につながり、目標をつくることが大切になっていきます。キャリア教育にもつながるのですが、目標をつくる場面をていねいに行くと、自ら学ぶ意欲が高まります。そうすると、嫌なことでもしようとする忍耐力も育まれます。

つまり、目標がないと「自ら学ぶ意欲」はありえないということです。

子ども達が学校に魅力を感じ、学校に行きたいと思う理由は、「学習が楽しい」「友達がいるから楽しい」「部活動があるから楽しい」など、学習・人間関係・活動に魅力を感じているからです。その意欲を充足させるために教師は、適度な刺激を入れ、目標をもたせ、自ら学ぶ意欲を高めていきます。

実践DVD視聴 「福翔高校 1年生 OR（生徒指導総合講座）」

風土会の講師 重枝先生は現在、福翔高校の教頭先生です。

その重枝教頭先生が、福翔高校1年生全員を対象に行った「生徒指導総合講座」の内容を紹介します。

風土会では、DVDを実際に視聴し、重枝先生の解説を聞きながら学びました。

映像があると、生徒の活動の様子や表情、雰囲気わかり、イメージがつかめました。

それを、どれだけ文字で伝えられるかわかりませんが、実況中継するような気持ちでお伝えします。

授業の内容は、以下の通りです。

- 1 成功の循環
- 2 段階的成長
- 3 信頼（トラストアップ、トラストフォール）
- 4 コミュニケーション（ワードトーク）
- 5 「べき」のすりあわせ
- 6 いじめのロールプレイング
- 7 グルーピング
- 8 ビーイング

生徒は、体育館に集会形式で整列して座っています。学習プリントと筆記用具をもっています。学習プリントには、「授業の基礎的条件」の図が示されています。

重枝先生は、マイクをもって1年生全員を見渡し、語り始めました。

「今から、学校生活で大切にしてほしいことについて、授業をします。

プリントのタイトルである、文武両道を体現する生徒を目指してというのは、福翔高校の学校教育目標です。その下にある、基礎的条件を意識した授業を通しては、図を見てください。説明します。

基礎的条件は円の外側の部分です。学習の勢い、学習の雰囲気、2つあわせて学習の基礎的条件と言います。勢いを出すためには、ここからは、顔を上げて聞いて、先生はサッカーの指導を長年してきました。自分自身もサッカーをしてきたからわかるけど、生徒に狭い場所で石ころがあるようなデコボコのグラウンドで、さあ、必死に練習しなさいと言うと、先生に怒られるからイヤイヤでも練習するけれど、今ひとつ意欲がわかない。ところが、その生徒を、きれいな芝のグラウンドで、ラインが引かれたきれいなグラウンドで、さあ、練習すると言ったら、先生が何も言わなくても、どんどん走って練習する。

環境ってものすごく大切。

部活で言えば、練習の勢いを生みます。だから野球部は、グラウンドをきれいにするのですよ。剣道部は道場をきれいにするでしょう。どんな部活でもそうです。

勉強する教室も同じです。部活も授業も全部イコールで結んだ意識であってほしい。

これが、文武両道ということです。

もちろん、規律が大切です。部活動にもルールがある。それぞれの部活にきちんと目標がある。授業も一緒です。学習規律がある。この教室環境と学習規律をあわせて、学習の勢いが生まれる。さあ、勉強するぞ！という学習に向かう勢い、これが基礎的条件のひとつです。

もうひとつが雰囲気。これは、そこで学習する人達でつくられる。

本当に陰悪な人間が同じ空間にいて、そんな人間関係の中では気持ちが集中できませんよ。安心できませんよ。だから、今、ここで授業をしていますけど、君たちがお互い認め合う関係、先生と君たちが、お互い認め合う関係、「肯定的な人間関係」と書いていますが、発する言葉ひとつにしてもそうですが、その雰囲気が大切。この二つ。勢いと雰囲気で、基礎的条件が成り立っています。

それがある学校は、伸びます。自分のもっているレベル以上に達することができる。これが不思議です。それを、成功の循環と言います」

ホワイトボードに「成功の循環」と書き、生徒にもメモするように指示を出します。

「関係性の質が高まると、つまり、君たちの横の関係がよくなると、友達と仲が良ければ、言いたいことが言える、自分の考えをきちんと伝えることができる、そしたら、一人で考えるより、何人かの考え、自分と異なる考えを聞くことによって、考えが広がります。一人で考えたって、たかがしれています。もしくは、同じ意見をもっている人と話し合ったりすると、考えが深まります。

これが、『思考の質』が高まるということです。仲が良ければ、みんなの仲が良ければ、どんどん『思考の質』が高まります。

そうすると、『行動の質』が高まっていくのです。話し合いをした。意見が出た。みんなで決めた。

じゃあ、やりますよということになるでしょう。『行動の質』が高まります。

集団で動くときに、一人で考えたことをする場合は、本当にこれをやっていいのかと不安になります。でも、たくさんの意見を出してみんなで決めたら、行動が積極的になります。

それで、『結果』が出るのです。これが成功の循環です」

ホワイトボードには 「成功の循環」

「関係性の質」→「思考の質」→「行動の質」→「結果」と板書

「君たちは中学生の頃、合唱コンクールや体育会、卒業式など、たくさん経験してきたと思います。全部、この『成功の循環』の理論があてはまります。

例えば、合唱コンクールの練習が始まると、もめることがあります。男子が歌わないとか、女子がイライラしたりするとか。そんな中で、お互いの関係の質が高まると、昼休みや放課後に集まって練習しようとか、パート練習をしようとか、いろいろな考えが出てきて、みんなで行動すると結果が出ます。

部活動でも一緒です。先生もずっとサッカーの指導をしてきて、この理論について選手に話をしてきた。結果を出したい。じゃあ、まず、どうしなければならないのか。答えは、関係の質を高めることです。べたべた仲良くするわけじゃないよ。もっと、こんな風に練習しようよと本音が言い合える関係の質ですよ。そうすれば結果が出ます。もちろん、優勝するというのも結果。でも、そんな小さなことではなくて、達成感が違います。やった後の満足感が。次のステップに必ずつながります。だから、仲良くしておきなさい。お互いの悪口を陰で言ったり、人の嫌がることをしたり、そんなことはするなということです。

段階的に君達は成長してきているのですが、まず赤ちゃんとして生まれます。一人では何もできません。よくよく考えたらびっくりするよね。今、ここで元気にいることが。だって、何もできない頃にほったらかされていたら、生きていけないのだから。お風呂に入れてもらったり、ご飯を食べさせてもらったりして、今、ここにいるのです。

人は、0才から3才までで、何が一番大切なのか、一言で表すとしたら『信頼』です。スキンシップ。みんなもきっと、まわりにいる先生達もきっと、小さい頃は抱っこされていました。一人で立ったりできないのだから、スキンシップがありました。そこで『信頼』を学んでいます。

4才から7才くらいまで、人として成長するために何が大切かを一言で言えば、『我慢』です。

急におしっこがしたくなって、ここでする人はいませんよね。あたりまえのようですが、この年齢の頃にそういう我慢を覚えているからできるのです。もちろん他にも、あれが欲しい、これが欲しいというのを君たちの親御さんが我慢させたりしています。この年代に『我慢』する経験をしていないと、人として成長できない。

小2から小5くらいまでで大切な一言。今は、君たちはわかるよ。前に座っていても、一番遠くに座っている人のことも意識できる。だから、今、整列できている。ところがね、小学校の低学年くらいの頃は、自分の周りのことくらいしかわからない。教室全体のことには、あまり意識がいかない。人との関係というのが、まだ弱い時期です。だから、この時代には、『思いやり』というのを教えていく。

そして、小6から中1くらいになると、周りとの関係がとれるようになってくるので『感謝』を教える。そうやって、人として成長していく。

だから、先生も、小学生に授業したことも中学生に授業したこともあるけど、この話をします。

みなさんは、小6から中1くらいまでに徹底して友達に『ありがとう』と言いましたか。何かをしてもらったり、助けてもらったり、支えてもらったりした時に、『ありがとう』ってどんどん言っていますか。それができていないと、人として成長できません。小さいとき、ちゃんと我慢していましたか。

もちろん誰だって、先生だって、足りなかったりします。だから、君たちも高校1年生になったけど、これらを意識しなくてはならない。そうすれば、『感動』できる人になれます。

ちょっとしたことで感動できる人ってどうですか。人生、幸せですよ。

誰かのせいにして、世の中のせいにして、愚痴を言いながら生きていくよりね。ちょっとしたことで感動できたり、人に感謝できたりする人のほうが、幸せな人生を送りますよ。それが人間性です。

では、成長的段階の最初は何でしたか。『信頼』です。そこで、君らに、信頼関係を体感してもらおうと思います」

ここで、二人の男子生徒をステージに上げます。二人に見本を示してもらいます。

二人で向かい合って座り、足と足をくっつけて、手を引っ張り合って立ちます。足の力ではなく、手を引っ張り合って一緒に立つのがポイントです。トラストアップと言います。

見本を見た後、体育館中に広がって、全員でやってみます。

しばらく活動させた後、その場に座らせて、重枝先生に注目させます。そして、語り始めました。

「みんなが一生懸命、活動してくれたのは、いいなと思いました。何か実感できましたか。人って、信頼、スキンシップって握手するだけでもいいのです。手と手をしっかり握って、同じ力が入ると二人の身体がグッとあがります。次は、4人でやってみよう。先生が教えた中学生は、8人でもできたぞ。では、4人一組になって」

生徒達が活動を始めます。とても楽しそうな雰囲気です。男子生徒より、女子生徒の方がうまくいっているようで、拍手も聞こえてきます。

重枝先生の「やめ」の合図で、生徒達は重枝先生に注目します。

「できていないグループもあったな。本当に相手のことも考えないと、自分だけが立ってもダメだから。お互いが同じ力を入れないと、相手だけが強い力でもダメで、相手のことを考えて合わせないとうまくいかない」

次に、野球部の生徒を一人、前に出して、重枝先生と一緒にデモンストレーションをします。

「目をつぶって、右手をあげて、おろして、目をつぶったまま後ろに倒れてください。先生が必ず支えるから。はい、やろう。手を下ろしたら倒れて」

生徒が倒れます。先生が支えます。思わず周りの生徒から「おー」という声。

「早く止めると、実感ができません。でも、やりすぎると危ない。今、先生の姿勢を見ましたか。絶対にケガをさせたらいかんと思っているので、かがんでしっかり手を出して支えました。立ったままだと、ズルッとぬけることがあるので、危ない。今度は先生がするから、いいな」

重枝先生が倒れます。生徒はかがんで、しっかりと支えました。また、周りの生徒から「おー」という声があがります。そして、大きな拍手。

「先生は、ある中学校で、その学校のボスのような女子生徒に全校集会で、同じことをしてもらいました。そしたら、先生は倒れてしまった。相手は女の子だったから、支えられなくて。先生は最後まで倒れて、そしたら、その女の子が先生の布団みたいになって下敷きになってくれていました。先生は、その生徒のことを信用したね。そんなものなんです。自分はどうかろうが、相手を、友達を助けるって、カッコいいじゃないですか。」

さっきも、先生は信用して倒れました。信用していない人は、ちょっと倒れて、自分の足で自分を支えようとします。では、2人一組でやってみよう」

生徒は、活発に活動。しばらく活動させた後、「やめ」「生きていますか。大丈夫ですか」

「実感できたら、いいなと思います」

「今、2人組をつくってとか、4人組をつくってとか、平気で言っているけど、先生自身は不安でした。一人ぼっちになっている生徒はいないかなと思って。そうしたら、さっき、4人一組をつくってと言った時、素敵な光景を見ました。自分たちは4人組になっているのに、まわりを見回して、呼んでいたのです。呼ばれた人は、どんな気持ちだっただろう。うれしかったと思います。さっと駆け寄ってきてくれて、手を引いてくれたら、もっとうれしいですよ。スキンシップってということよね。」

4人一組になって、自分たちはできたから平和そうな顔をして、そういう人達のことを、先生はあまり評価していない。これだけ人数がいるけど、全体のことを考えられる人を一生懸命、見つけています。」

指さしながら・・・「そこの人達と後ろの方の女子のグループの人達が、全体のことを考えた行動をしていました。評価されるのは、そういうところですよ」

次に、一人の男子生徒を立てて、アイマスクをさせます。その場でグルッとひとまわり、まわらせます。

「今から先生が、言葉だけで中山先生の隣に座させます」

中山先生は、体育館の左後ろのイスに座っています。男子生徒は中央の前にいます。かなり、距離があります。(中山先生は野球部の顧問、男子生徒は野球部という関係です)

「中山先生のヒザの上に座ったら、大変なことになるからね」(生徒の笑い声)

「中山先生の隣まで連れて行くからね。どうするのか、みなさんは見ておいてください」

「では、がんばるよ。右に90度、身体の向きを変えてください。

おっ、いいね。そこから5歩、まっすぐ歩いてください。1, 2, 3, 4, 5。

その歩幅ね。では、その歩幅で10歩、そのまま前に歩いてください。

おー、みんな優しいね、よけてくれている。今から、一切よけるな。ぶつかってもいいから。

左に少し、向きを変えて。OK! まっすぐ、5歩、歩いてください。1, 2, 3, 4, 5。

右に横ばいで2歩、進んでください。おっ、見えているかのようにいいですね。

左にちょっと向きを変えてください。ちょっと行き過ぎ。そうそう、あとちょっとだから、がんばろうね。

まっすぐ、10歩進んでください。あと、3歩、まっすぐ行ってください。あともう一歩。

ちょっとしゃがんで、手を前にのばしてください。OK, それがイスです。そのイスに座ってください」

まわりから、「おー」という声、そして、自然と拍手。「はい、ゴールです。おつかれさま」

アイマスクを外した生徒の表情も笑顔になっています。

ここで、重枝先生が男子生徒にインタビューをします。

「先生は一生懸命、君に声をかけました。先生のよかったところを教えてください」

「指示が具体的でわかりやすかったです」

「そうか。指示が具体的というのは、少しずつ段階的に指示をしたということかな」

「はい」

「他には」

「優しい声かけをしてくれました」

「ありがとう、では、みんな、拍手」

そして、ホワイトボードに注目させます。

「今、彼が言ってくれたこと、2つありました。今、彼と先生は、コミュニケーションをとりました」

ホワイトボードに「コミュニケーション」と書きます。

「最初に彼が言ってくれたのは、説明がわかりやすかったということです。確かに先生は、角度とか歩数とか、具体的に伝えたつもりです。一気に100歩真っ直ぐ歩いてとは言っていない。段階的に伝えました。これは、勉強も同じです。先生達が授業をするときに、いきなり難しいことを長く話したりはしません。君たちに、少しずつ話して、わかっていることを確認しながら段階的に進めていきます。だから、普通に授業をきちんと聞いていれば、今みたいにゴールできるのですよ。これが授業です。それが、意味面です」

ホワイトボードに「意味」と書きます。

「もうひとつ、彼が言ってくれたのは、言葉かけが優しくかったということ。先生も意識していました。

まず、最初に、がんばろうと言いました。あと、気付いたかどうかかわからないけど、みんな優しくかったよね。通路の人達がよけてくれていたのを、先生は途中で、よけなくていいと言ったよね。その瞬間、彼の歩幅が少し小さくなったのに気付いた？

きっと、不安になったんだよね。それは、当然です。

その時に先生は、あとちょっとだから、がんばろうと声をかけました。

これが感情面」

ホワイトボードに、「感情」と書きます。

コミュニケーション

意味



「コミュニケーションというのは、意味と感情を統合したところです。
ここが、人が集まる場所、学校で行うコミュニケーションです。
意味と感情を統合したコミュニケーションをすると、人に伝わるし、人は動いてくれるのです」

「じゃあ、君たちに聞くよ。コミュニケーションは意味と感情の両方が必要ですと、君たちに言いましたね。
では、意味だけ、感情はあまりない領域では、例えば、どんなのがありますか。話したり伝えたりすると
きに、意味はある。だけど、感情はあまりない。例えば、事務連絡とか、打ち合わせみたいなもので、意
味だけ伝えるような場合ね。では、逆に、会話の意味はあんまりないけれど、感情だけはしっかり伝わっ
ているのは、例えば、恋愛。会話の意味はたいしたことなくても、気持ちは交流している。
では、意味を否定する、相手の感情を受け入れない場合は、戦争に入るときの人の気持ちだと、中学生に
授業をしたときに、生徒が言っていました。どうですか。
人がたくさん集まる学校では、戦争状態の対極にあるコミュニケーションをとることです。
では、書いてください」

ホワイトボードに「コミュニケーションは、意味と感情を統合する」と書く。

「意味と感情を統合したコミュニケーションを、日常生活で実践してください。
結構、していると思いますが、徹底して実践してください。
例えば、先生はサッカーが大好きだからサッカーで例えるけれど、ゴールキーパーを指導するときに、技
術はもちろんですが、サッカーはチームスポーツです。学校生活もチームスポーツとイコールなんだけど、
はい、顔を上げよう。ゴールキーパーにこんな指導をするんですよ。想像してみてください。キーパーは
みんなも知っていると思うけど、点をとられてはまずいんですよ。だけど、キーパーが1人だけで頑張っ
ても、ボールがぬけたら点が入ってしまいます、当たり前だけど。だから、ディフェンスと協力します。
そんなときに、キーパーはディフェンスに何と言いますか。
ディフェンスに向かって、右に行け、右に行け、左、左に行け・・・などと一試合ごとにずっと言ってい
ると、ディフェンスからすると、うるさいという気持ちになり、けんかになります。これは、意味だけ伝
えているからです。
逆に、感情だけ伝えるとします。ディフェンスに、頑張れ、頑張れ、頑張れ、というように、一試合中、
言っているのもどうですか。だから、キーパーに、意味と感情の両方を伝えるように指導します。
右に行って、そうサンキュー。試合中だから、たくさんは話せないけれど、アイマスクをした男子生徒が
言ってくれたように、的確な指示を出しながらも、ちゃんとお礼も言うとか、優しい言葉をかけるとか、
そしたら、人は動いてくれます。
関係性の質を高める、ここにいるみんなだね。関係性の質を高めるときに大切なのは、ひとつはコミュニ
ケーションです。コミュニケーションは、質より量ですよ。友達にツヤなこと言うだけじゃダメですよ。
いっぱい、いろんな話をお互いしないとダメよ。親友同士は、たわいのないことをいっぱいずっとしゃべ
っているでしょう。コミュニケーションは質より量です。そのコミュニケーションは、意味と感情を統合
させる。ちょっとしたことに対しても、ありがとうとか、助かったとか、何だっていいから言ってくださ
い。そうすれば、関係性の質が高まるから。結果が必ず出る」

「学習の基礎的条件の下の部分の『学習の雰囲気』について話しましたが、最終的に何を学んだかというこ
とがポイントです。それは、どれくらい君たちが先生の話の内容をキャッチできているかということで、
そこが最終的に大切になってきます。

では、次に、学習の勢いを生むためのルール、学習規律、勢いを生むためのルールについて、話したいと
思います」

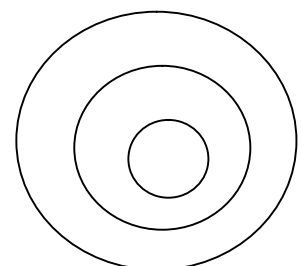
ホワイトボードに円を3つ描いて、と番号をふります。

「人ってそれぞれ、いろいろな考えをもつよね。
こうあるべき、こうするべき、というように」

ホワイトボードに「べきのすりあわせ」と書く。

「今から、べきのすりあわせをしてもらおうと思います」

「べき」のすりあわせ



「1番は、自分と同じ考え、これが
2番は、自分と違う考えだけど、許せる、分かるというもの、これが
3番は、自分と違う考え、しかも、許せない、これが
理解しましたか。では、今から、みんなの考えを聞いてみます。
目玉焼きに何をかけますか。まわりを気にせず、1、2、3のどれと同じか、自分の考えを言ってください。
まず、目玉焼きにしょうゆをかけます。番号を声に出して言ってください。せーの」

生徒達の声「1」「2」

「1と2の声が聞こえたね。3の人はいないかな。先生は3ですけど。人はいろいろだからね。
では、次、目玉焼きにマヨネーズをかける人、せーの」

生徒の声「3」「2」

「3と2が聞こえる。先生は1でもいいのだけど。だんだん、先生だけおかしい人。ちょっと、嫌な気分。
目玉焼きにケチャップをかけます。せーの」

生徒の声「3」「1」「2」

「ちょっとバラけた。月見バーガーとかね、ケチャップは、よさそうな気がしますけどね。
目玉焼きにソースをかけます。せーの」

生徒の声「3」「1」「2」

「けっこう、バラバラですね。声に出してみよう、ちゃんと。自分の考えが言えないのはよくない。自分の
考えはあるよね。みんな、目玉焼きは食べたことがあるから。まわりが不安ですか。そういうことになっ
てくるよね。だから、基礎的条件というのが大切。言えないとダメですよ。この中で。はい、次は塩・こ
しょうをかけます。せーの」

生徒の声「1」「2」 前よりも生徒の声は大きくなっています。

「ああ、先生も正直これです。だいたい、塩をかけて食べています。あとは、何がありますか。今、言った
もの以外をかける人はいますか。
では、最後ね、目玉焼きにイチゴジャムをかけます。せーの」

生徒の声「3」 声がそろっています。

「そうですね、先生も同じです。結局、何が言いたいかというと、人それぞれ、『べき』があるということ
です。それを、すりあわせることができないとダメですよ、ということです。そうじゃないと、一緒に生
活できない。だから、授業のルールもきちんとあるのです。
例えば、今、みんなが受けている授業、この集会が2時から始まります。実際、2時から始まりましたが、
2時から始まるなら、何時にこの状態になっていないといけませんか。それぞれ、紙に書きなさい。
それぞれ、自分の考えを書きなさい。何時何分に、この状態になる『べき』ですか。
書いたら、近くの人紙を見なさい。自分の考えを書いていない人は、見る資格はありません。自分の考
えを書いたら、最低3人の人と交流しなさい」

生徒が交流した後、生徒に発表させます。

「何時か言ってください」「1時55分です」「1時55分です」「1時55分です」

「みんな、同じ考えですか。今までの経験で、5分前行動と言われてきているからかもしれないね。
だから、2時3分になって、3分遅れて入ってきたら、怒られて当然だね。
みんなの『べき』が1時55分であれば、それは、納得して怒られるはずなんですよ」

「だけど、『べき』のすりあわせがきちんと行われていないと、どうして怒られるのか、納得できない人がいるかもしれません。そこが、集団生活の難しいところで、そこが、勉強なんです。自分の考えをもって、友達と交流して、決めるんです。合意することが大切なんです。

廊下で先生とすれ違います。福翔高校の先生や外から来たお客さんとすれ違うときに、あなたは、どんなあいさつをする『べき』ですか。自分の考えを書きなさい。ちゃんと、自分の考えをつくりなさい。自分の考えをもてない人は、一生、誰かの言うことを聞いていなくてはなりません。それは、格好悪いよな。自分の考えを書いたら、近くの人と交流しなさい」

しばらく交流させた後、数人の生徒を前に出して、発表させます。

「礼をして、相手に聞こえる声であいさつをするといいと思います」 拍手
「相手の目を見て、大きな声であいさつをするといいと思います」 拍手
「明るい声であいさつをするといいと思います」 拍手

「これを、みんなで共有しておく、みんなが安心して行動できるようになります。これは、『成功の循環』の中の、思考の質を上げているところです。あの人は、こんな風に考えているんだ。自分と同じだ。あの人は、自分の意見とは違うけど、いい意見だから、自分も取り入れよう。いろいろと人の考えを聞くことで、行動が積極的になるのです。あの人もするなら、自分もしようというように、本当は、人がするから自分もするというのは、格好悪いんだけど、安心して大きな声であいさつできたり、相手を見てあいさつできたりする。いろいろな意見がわかり、それを共有する。そして、福翔高校のあいさつがどうあるべきなのかは、先輩達が示しているはずですよ。それも、しっかり見てください。しっかり見ておいてください」

その後、重枝先生は、ホワイトボードに「いじめ」と大きく書きました。

「基礎的条件を最も阻害するのは、人の嫌がることをする人です。そんな雰囲気を出す人です。これは、学校としても、徹底して許しません。最初に言っておきます。これに関しては、もしかしたら学校を続けられないくらい、厳しく指導します。そこを、最初にしっかり考えてください。お互いを尊重しながら、お互いのよさを見つけながら、学校生活を送ってください。

この人には、いいところなんかひとつもないと思うような人がいるかもしれません。それは、問題集でいえば、難しい問題を解くようなものかもしれません。難問です。でも、あきらめたらダメ。どんな気持ちになるかということ、を実体験してもらいたい。その生徒、10人、前に出てきて。君は、元気なタイプ？野球部？こっちに来て」

野球部の男子生徒を1人、いじめられっ子に見立てたロールプレイングが始まりました。

いじめられっ子に見立てた生徒の前に、いじめっ子が3人立ちます。その後ろに3人、その後ろに3人。1人对9人です。

いじめっ子役の3人には、心の底から意地悪な気持ちで、相手をにらむように指示します。顔で嫌な感情をつくり、思いっきり、嫌な空気をつくるようにと、重枝先生は言います。

重枝先生の合図で10秒間、にらみます。後ろの6人の生徒は、じっとその様子を見ておくように指示されています。絶対に笑わないようにと、注意をします。

「この状況で、たった1人で、どんな気持ちがしましたか。嫌な顔が自分に突き刺さるのは、どうですか」重枝先生が生徒に問います。

「ちょっと、びっくりしました」

「そこで、重枝先生がこのクラスで、人権学習をしました。そうしたら、後ろの3人が授業を理解しました」

いじめっ子の後ろにいた3人の生徒を、いじめられっ子の後ろに立たせます。

「もう一度、さっきと同じように、にらんで。はじめ」 その前と比べさせます。

「さっきと比べて、どうだった」

「普通でした」

「なぜ」

「人数が少なくなったので、プレッシャーが減ったからです」

いじめっ子役の生徒にも聞きます。

「どうだった」

「相手が強くなったように見えました」

「そうだね、後ろに3人増えると、感じが違うよね。」

では、また、重枝先生が授業をしたら、残りの3人も理解しました」

残りの3人も、いじめられっ子役の後ろに立たせます。

いじめっ子役の3人の後ろには、誰もいなくなりました。

「どうだった」と重枝先生が感想を聞くと、

いじめられっ子役は「もう、怖くなくなりました」

いじめっ子役は「負けました」と答えました。

ロールプレイが終わり、拍手して、生徒達を戻します。

「今、見てもらって、何が影響しているかわかりましたか。」

加害者であるいじめている人、被害者であるいじめられている人達ではなくて、傍観者や観衆と言われるまわりがどうかということで、大きく変わりました。

最初は、被害者が1人ぼっちだったけれど、3人、被害者の後ろにまわった。その後、6人になった。

そうすると、いじめていた人達が、自分たちが負けているような気持ちになった。

つまり、まわりが大切ということです。

だから、嫌な思いをしている人がいる。嫌な思いをさせている人がいる。あの人とあの人の問題というように考えてしまいがちですが、そうじゃない。

みんなに責任がある。それをよく理解しておかないと、この問題はなくなる。

みんなの雰囲気、いじめはなくなるのです。だから、絶対、いじめは学校として許さない。

そして、いじめは、その場にいる全員の責任です。そのことをしっかり、覚えておいてください」

「では、最後に、プリントに、人の形を書いて、身体の中に、人からされたり言われたりして、うれしいことを書きなさい。言葉と行動ね。身体の外に、人からされたり言われたりしたら嫌なことを書きなさい。

できるだけ多く、自分の考えをつくって書きなさい。

横目で他の人が書いているのをチラチラ見ている人は、外に出す。

自分の考えをつくれと言っています。自分ひとりで考えなさい」

「言われてされて嫌なこと、まわりがしないようにすればいいでしょう。

それを、仲間知ってもらっておけば、嫌なことを言われたりされたりしませんね。

できる限り、たくさん書きなさい。質より量です。3年間、このチームで生活します。遠慮せずに、相手のことも考えながら、自分の意見をちゃんと伝えないと」

しばらく待ちます。生徒が書き終わった頃に、重枝先生から指示が出ます。

「今からホワイトボードに数字を書くから、その人数で円になってください。一言もしゃべらずに」

ホワイトボードに「5」と書いて、「用意スタート」

生徒は静かに5人組をつくりました。

「すごいね、みんな見た。このチームに、すごい選手がいる。鳥肌がたった。そういう感情、みんなにもあるよね。すごいプレーヤーだね。心から尊敬した。相手が高校生だって、尊敬します。こういう状態で、この人数が5で割り切れる人数なのかどうかは、先生も知らないし、君たちもわからない。今、この場で、絶対にしたらいけないのは、1人にすること。全体を見て、一人ぼっちを出さないこと」

今度は、ホワイトボードに「6」と書いて、「用意スタート」
さっきとは違う空気が生まれています。
全体を見渡している生徒が増えています。

「OK, 7人になったね。いいよ、この状態で、ズルをして7人になっているのではなくて、よく判断しているよね。全体を見ているよね」

「今、見ていて、自分たちだけ早くグループができて幸せそうにしている人がいるのだけど、確かに早くできたかもしれないけど、何の評価もないよ、こういう時はね。
何で全体を見ていないんですか。何で自分だけ幸せですか。ただ、もっと関係性ができて関係の質が高まれば、もっと早くなる。安心して手を引っ張ったりできるようになるから。では、最後」

ホワイトボードに「4」と書いて、「スタート」

「君たちの中に、どんな人間関係があるのか、先生は知りません。だけど、思いやりがあるから、楽しく学校生活を送れるんじゃないかと思います。先生は少なくとも、たぶん、まわりで見ている先生達も、何となく、今日のみんなの行動を見て、感じていると思います。行動しているからね、今、しゃべったらダメだと言われているから、口だけじゃなく、行動しているから。では、この4人一組で、自分の書いた内容を、一人一人話すのをきちんと聞いてください。誰が司会をしてもいいから、小さな円になって」

グループに1枚ずつ、紙を配ります。その紙に、グループで話した内容をまとめるように指示を出します。
「いろいろな意見があると思うけれど、それを、ひとつの意見にまとめてください。5分くらいで」

途中で、重枝先生が活動をとめて、指導します。

「まとめるときに、きちんと考えていますか。同じような絵を描いて、みんなの意見を書くグループがあるかもしれない。絵は描かないで、意見だけ文章にしてまとめるグループもあるかもしれない。また、決意表明のようにして、私たちのグループは、これは絶対にしめんとスローガンをつくるグループもあるかもしれない。どうやってまとめますか、自分たちのグループは。そういうことからです。ただ、何となく、言われたメニューに流されているようでは、おもしろくない。人に伝えますよ、この後に。伝えられるように準備してください。あと、5分です」

「やめ、どうですか。何が大切かというのは、たぶん、当たり前のことを書いていると思います。こんなことを言われたらうれしいのかと、さりげなくキャッチしてね。わざとらしく、その言葉を使っても、逆に伝わりません。さりげなくね、自然と出せないかね。逆に、言われたら嫌なことは言わないようにしましょう。勝負は一瞬です。たった一言で、君たちの年代は、特に、先生も高校生の時代があったのでよく覚えているけれど、友達のたった一言をずっと覚えています。先生はもう、50才になったけど、高校時代ってもう、何十年も前だけど、今でもよく覚えていますよ。高校1年生のときの、体育の授業の後で、隣に座っていた友達が、まだ、親しくない、みんなと同じような状態よ、他の中学から来た友達から、重枝、足速いねって言われたときの、あの教室の風景や空気感を、今だに覚えていますよ。正直、先生から言われたことは、あんまり覚えていないけど、友達から言われたことを覚えている、そういう年代です。小学生くらいだったら、親や先生からほめられたことを覚えているけど、中学生、高校生くらいの年代は、友達から言われた、たった一言が、一生、心に残ります。では、逆はどうですか。たった一言で、一生、その人の心に傷を残すことになります。びっくりするくらい、一生、残ります。先生は、高校時代の友達が一生の宝物、今だに、つきあいがあります。そんな年代ですよ、今」

「みんな、織物って知っていますか。洋服の生地です。縦糸の本数が多いのは、生地が強い。山笠に出るとき、帯が固いのは、縦糸が多いからです。横糸は、柄や模様を出します。

では、考えてみてください。縦糸は、先生とみんな、親とみんな。その関係がしっかりつくれていないと、崩壊します。だから、先生に対する言葉遣いは、まちがえないようにしてください。縦は大切です。だけど、色とか柄を出すのは、君らの横の関係が出します。君たちがつくるのです。君らで、この学年の色を出すのです。それを、先生達は楽しみにしています。

先生は、今日、はじめて君たちに話をさせてもらっているけれど、ものすごく、期待に満ちあふれています。びっくりするくらい、期待にあふれています、いいなって。どんな色を出すのかって。でも、君たちの横の関係が、変な色が出たりしないように、今日は授業をさせてもらいました。

最後に、スリッパを脱いで、今、書いた紙に全員乗ってください。用意、スタート」

小さな紙（B4）なので、4人がしっかりくっつき合わないと、紙の上には乗れません。

「肩車は禁止です。でも、おんぶはいい。何人乗れるか、となりのグループも入っていいよ。参加しろ、悩むな、行動しろ」

生徒達は、おんぶしたり、抱き合ったりして、スキンシップをとっています。

「ストップ、みんな、このグループを見て、気合い入っているよ、このグループ、よーい、はじめ」

モデルになるグループの姿を見せます。4人の上に4人が乗って、組み体操のような感じですよ。思わず、拍手が起こります。

「スリッパをはいて、もどれ」
重枝先生の声で、迅速に生徒達が動きます。

「メリハリ、ついてますね。

全体、起立。前にならえ。基準はつくっていないけど、4人一組になれというのと一緒です、この整列も。端っここの人のことまで考えて、ミリ単位で合わせます。

一人がずれると、端っこの方は、大きくずれることになる。まわりを考えて。なおれ。

横をチラッと見てごらん。満足ですか。同じってわかりなさい。4人一組で円になったのと、この整列が同じということを理解してください。もう一回します。

前にならえ。なおれ。座れ」

「長い時間、授業をしましたが、何が大切かということがわかりましたか。

もしかしたら、先生が言わなくても、もともと、理解している内容もあったかもしれませんが、この中のたった一人でも、悲しい思いをさせたらダメだということを考えて、授業をしました。

本当に強い人、格好いい人は理解していますよ。

陰でコソコソと人の嫌がることを言ったりしたりしている人は、格好悪いよね。

自分の中に、定義はありますか。格好いい人とは、格好悪い人とは、という定義はありますか。

自分の横で悲しい思いをしている人を見て見ぬふりをする、そんな人はどうですか。

何か言われている人がいる、助けないといけない、いや、知らないふりをしていよう、自分はどちらですか。

生き方の美学みたいなものをもたないと、この高校時代に。

そして、実際に行動できないと、思うだけじゃなくてね、それが本当の勇気です。それを本当に期待したいと思います。

では、この授業を終わります」

生徒達の「ありがとうございました」という、さわやかなそろった声で、休憩なし2時間の授業が終わりました。

今回のキーワード

- 人は人で磨かれる
- 学習の勢い：維持ルール→向上ルール
- 学習の雰囲気：コミュニケーションは質より量，振り返り活動
- 拡散的好奇心 特殊的好奇心

♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ （参加人数 13名）

- ・ 理論に基づいて、実際に実践している様子を DVD で見て、生徒の表情、姿勢、態度から、とても効果があると感じました。ぜひ、私自身も体験し、実感したいと思います。また、効果的な言葉かけも教えていただき、ありがとうございました。
活動に消極的な児童生徒への対応、声かけの効果的な技があれば学びたいです。
- ・ 人権教育は教育活動の土台になり、さまざまな教育活動につながっていることが改めてわかりました。
「いじめのロールプレイ」は、実際に試してみても実感できました。それを価値付けていくことが大切だと思いました。
- ・ 人権教育が全教育活動のベースになるということを強く感じました。教科はもちろん、特別活動さらには生徒指導にも重要だと思います。今まで、教科の中で生徒指導を行うことができると様々な研修で言われていたことを正直、理解できていませんでした。しかし、ルールを守らせること、相手のことを考えさせることは、人権感覚を身に付けるための基礎となり、協力・参加・体験を通して、事後対応的な生徒指導を減らしていくことにつながると感じました。頭ごなしに理解させるのではなく、体験的に心で感じて理解させていく接し方、指導を身に付けていきたいです。
- ・ 実践例を映像で見ながら、具体的に学ぶことができ、非常に有意義だったと思います。自分でも取り入れることができそうな部分を探して、積極的に取り入れていくつもりです。部活でも授業でも使える言い回しもあったので、自分なりの言葉にアレンジしながら生徒に伝えていければと思います。
- ・ 実践で使える参考になるお話を映像で学べて、とてもありがたいなと感じました。卒業生の様子を映像で見ることができ、福翔高校に行った生徒は幸せだなと感じました。今までの重枝先生、柴田先生のお話を聞き、勉強会に参加してきて、やはり子ども達に話す内容や子ども達の見方が、一昔前の自分とくらべて変わってきたような気がします。それでも、まだまだ自分自身がビジョンをしっかりと描き、それを自分の言葉で生徒に伝えられるほど勉強できていないし、自ら学ぶ意欲につながる目標をもたせるやり方も十分分かっていないので、これからも風土会に参加して、勉強していきたいと改めて思いました。ぜひ、次回は、今回の映像の続きを見て、学びたいと思います。
- ・ 思いやりを実践できるクラス経営につながる、実践的な活動内容を映像で見せていただきました。
清掃時間に、自分の担当場所だけ終わったらそれでいいという生徒と、終わったら友達の掃除場所も手伝う生徒がいて、その時に自分が教師として、何か話ができれば、もっと積極的に手伝う生徒が増えるのかなと反省しました。掃除でも、グループワークの手法を取り入れ、ほめながら叱るような指導をしていきたいです。私は感情的になりやすいので、自分が冷静になるトレーニングからしていく必要があると思いました。
- ・ 中学2年生の担当ですが、ゆるみが出てきている時期です。今日、学んだことを話したいと思います。
生徒間だけではなく、職員間でも共通理解・実践ができる環境をつくりたいです。

（本日、小学校の先生、中学校の先生、高校の先生、社会人の方が参加されました。）

みなさんがそれぞれの立場で、目の前の子どもや状況と関連付けながら学ばれ、実践されようとしていることに感動します。さわやかであたたかな風を送ってください。必ず、動きます！）